

モンテーニュのエッセイにおける 自己描写について*

家 永 道 生

Sur la peinture du Moi dans les Essais de Montaigne

par
Michio IENAGA

Dans cette étude j'ai essayé d'éclaircir les sens de la phrase: "c'est moy que je peins" à la préface des Essais de Montaigne.

D'après les Essais, il semble que la phrase signifie premièrement que Montaigne y peins sa personnalité et son portrait pour donner les connaissances plus vives de lui à la parenté et aux intimes; deuxièmement qu'il n'a pas d'intention d'imposer au publique les opinions illégitimes, qui sont quelquefois contenues dans ses Essais, car ces opinions ne sont que personnelles; et dernièrement que "peindre soi" lui est l'effet de "connaître soi-même", l'acte essentiel à sa philosophie.

モンテーニュが、彼のエッセイでおこなっている、自らを描くという行ないについては、種々の観点が成り立ち得ると思われる。当小論では、自らを描くということの、エッセイにおける内的位置を概観する。

(なお、依拠したエッセイの原書、及び略号等については、論文末尾の註1～5に記した。)

モンテーニュ (Michel de Montaigne, 1533. 2. 28 — 1592. 9. 13) は、彼のエッセイ *Essais* の序文で、《私が描くのは私である。c'est moy que je peins.》*1、《私の本の題材は私自身である。je suis moy-mesmes la matiere de mon livre:》*2 と述べているが、これはどのような意味もしくは背景を持っているのであろうか。

上のようにモンテーニュが述べる一つの理由は、序文の初めに次のように記されている。《読者よ、ここに誠実な本がある。最初から諸君に云っておくが、私はこの本で、家族的な・私的な目的以外もくろまなかった。諸君の役に立とうとか、誉れを得ようとかという考慮は、ここで、一切払わなかった。私の力は、そん

* 水産大学校研究業績 第661号, 1972年1月24日 受理.

Article reçu le 24 janvier 1972 et numéroté 661 par l'Université des Pêches de Shimonoseki.

*1. Au lecteur, p. 3. *2. ibid.

な企てには力及ばない。私はこの本を、親族や友人だけの便益の為に捧げたのだ。つまり、(まもなく彼らに起こることだが)彼らが私を失った時、私の性質や気分の或る特質を、彼らがここ〔エセエ〕に再び見出せるように、また、そのようにして、彼らが私に持っていた認識を、もっと完全な、もっと生き生きしたものへと養ってくれるようにである。 C'est icy un livre de bonne foy, lecteur. Il t'advertit dès l'entrée, que je ne m'y suis proposé aucune fin, que domestique et privée. Je n'y ay eu nulle consideration de ton service, ny de ma gloire. Mes forces ne sont pas capables d'un tel dessein. Je l'ay voué à la commodité particuliere de mes parens et amis: à ce que m'ayant perdu (ce qu'ils ont à faire bien tost) ils y puissent retrouver aucuns traits de mes conditions et humeurs, et que par ce moyen ils nourrissent plus entiere et plus vifve, la connoissance qu'ils ont eu de moy.》*1 と。即ち、このエセエという本は、親族や友人あてに、自分の一層完全な姿を知り、保持して貰いたい為に記したと、モンテーニュは云うのである。事実、彼がエセエの中で、自らについて語っている所は実に多く⁽⁶⁾、而もそこには、彼についてのさまざまな事が記されている。例えば、いつ生まれたか*2、どのようにして育てられたか*3、どのような決心で隠棲したか*4、書齋はどんな様子か*5、好んでどのような本を読むか*6、どんな読み方をするか*7、果ては、容貌・体格・性格に至るまでが記されている*8 といったふうである。こうしたことを考慮すれば、たしかに、モンテーニュが序文で云うところの、自己描写をしたのは親族・知友の為だという理由も、それなりに受け入れられない事はない。

しかし、この、エセエは近親や友人だけに当てたものだという言明が、額面通りに受け取り得ない事は——モンテーニュ研究者達によって觸れられている事であるが⁽⁷⁾——明らかであると考えられる。なぜなら、一つには事実の問題として、モンテーニュは、彼の記したもののうちでも《旅日記 *Journal de Voyage*》⁽⁸⁾の方は出版に付さなかった⁽⁹⁾のに、エセエの方は出版して、人々多くに読まれる形を、彼自らでとったからである。⁽¹⁰⁾ 更に、エセエを内容的に見た場合にも、世間一般に向かって語ることも実に多く、とりわけ、彼の生存時に吹き荒れた、新旧両教徒の対立抗争が示す、人間無視の態度や残虐行為への非難は、エセエの主張の大きな一面をなしていたと考えられるからである。⁽¹¹⁾

それにしても、世間で読まれることを意識し、またそれを期待していたにもかかわらず、どうして序文のような言明をしなけりなかつたのであろうか。その理由を、更に我々は考えてみなければならぬ。

その理由の一つは、この当時の社会からすれば、異端である観点を、彼の思想が内包していたと見做され得ることであろう。このことは、彼がエセエの中に洩り込ませている、次のような一文にもあらわれている。即ち、彼が日頃、往々にして、古代ギリシャ・ローマの事例を手懸りに、色々の事を述べているので、これについての、人々の非難めいた希望に答えるという形で次のように云う。《或る人達は、現代の諸々の出来事を書くように私に勧める。この人達は、こうした出来事を、私が、他の人よりも感情によってそこなわれない眼で見ており、また、運が色々の党派の主領に私を近づけた為に、一層仔細に見ていると思っている。けれども彼らは、サルスティウス*9の誉れの為であっても、私はそのようなことはしないだろう。私は義務や精励や堅忍不拔とは、不倶戴天の敵なのだと云ってくれない。また、長い叙述の仕方ほど、私の文体と反対のものはない、とも云ってくれない。私は息切れがして、実に度々話を切る。極くありふれた事柄を表現する文も語句も、子供以上に知らない⁽¹²⁾から、私は構成もできなければ祿な解明もできない。このような理由から、私は題材を自分の能力に合わせて、自分の云えることだけを云おうとしたのだ。もし、私の方

*1. Au lecteur, p.3. *2. p.84. *3. p.173sq. *4. p.33. *5. p.828sq. *6. p.146, 246, II—10.

*7. II—10. *8. II—17. *9. Gaius Sallustius Crispus (86—c.34B.C.). 古ローマの著名な歴史家(政治にも一時関係した)。歴史的事象について研究した彼の書物には、当時のカティリナの乱を扱った《カティリナの戦い *Bellum Catilinae*》がある。またそのほか、ヌミディア王ユグルタに対する、111—106B.C.のローマの戦いを扱った《ユグルタ戦 *Bellum Iugurthinum*》という書もある。ともに現存すると云われる。(cf. *Britanica*, 1963)

が手を引かれるような題材を私が扱ったら、私の力はそれに及び得なかつただろう。彼等は、私の自由は余りにとらわれないものであるから、意のままに書いても理性にしたがって書いても、非合法的な、そして罰される判断を、私が公けにしたかもしれない、とは云いはしない。Aucuns me convient d'escrire les affaires de mon temps, estimants que je les voy d'une veuë moins blessée de passion qu'un autre, et de plus pres, pour l'accez que fortune m'a donné aux chefs de divers partis. Mais ils ne disent pas que, pour la gloire de Salluste, je n'en prendrois pas la peine: ennemy juré d'obligation, d'assiduité, de constance; qu'il n'est rien si contraire à mon stile qu'une narration estendue: je me recoupepe *1 si souvent à faute d'haleine, je n'ay ny composition, ny explication qui vaille, ignorant au-delà d'un enfant des frases et vocables qui servent aux choses plus communes; pourtant *2 ay-je prins à *3 dire ce que je sçay dire, accommodant la matiere à ma force; si j'en prenois qui me guidast, ma mesure pourroit faillir à la sienne; que *4 ma liberté, estant si libre, j'eusse publié des jugemens, à mon gré mesme et selon raison, illegitimes et punissables.》*5 と。少し長い引用であったが、それは、彼がいかに巧妙に自分の云いたい事を、そっと挿入したかをも表わしたかったからである。当面、特に注目したいところは、引用の最後に、「もしはっきりと自分の意見を記せば、それは、《des jugemens…illegitimes et punissables 非合法的な、そして罰される…判断》となったであろう」と、彼自身が述べている点である。実際のところ、彼は、既に筆者が他の論文で解明を試みた *6 ように、心の底からのカトリック信者ではなかつたろうと推測される。

彼は、エッセエの中で、色々な手法を用い乍ら——例えば、上に引用した文章に見られるように、自分の云いたいことを、そっと迂り込ませたり、或は自分の意見を分断して、途中に無関係な文章を入れたり、或は意見の前後に、カトリックに対して特に敬虔な言辭を、ことさらにくつつけたりし乍ら、自分の云いたいことは一応述べているのである。*7 このような訳であるから、序文に記された、「この本で私は自分を描こうとした。この本は単に近親・知友を相手にしたものである。」という言明は、一つの口実として役立っていると云えるであろう。即ち、近親相手に自分を語っているに過ぎないのだから、エッセエに記された意見が、たとえ世間一般のものと同様であっても、一般の人々にそれを勧めようとするのでは、決してないという口実である。

しかし、「自分を描こうとした」と、序文に云われたのには、一層、彼の本質に関わる別の意味が込められていたように思われる。即ち、自分は自分として、このエッセエの中に登場している。換言すれば、常日頃の自分の姿全体を傍らに置いて、単に文法学者としてとか、或は学芸の一つの専門家としてではなく、裸の自分が全体としてここに出て来ているのだ、という意味があったであろう。そのことは、次の文章にも云われている。《著者たちは、人々に、特別な・特異な或る特性によって自らを伝える。だが、この私は、文法家とか、詩人とか、法律家としてではない、ミシェル・ド・モンテーニュとしての、私の全存在によってそうする最初のものである。Les auteurs se communiquent au peuple par quelque marque particuliere et estrangere; moy, *8 le premier, *8 par mon estre universel, comme Michel de Montaigne, non comme grammairien ou poëte ou jurisconsulte.》*9 と。ここで、偽らぬ自分の全体を記している

* 1. Se recouper: se couper la parole. (Lex.)

* 2. Pour ce motif. (Vil.)

* 3. Prendre à: entreprendre de. (Lex.)

* 4. Ils ne disent pas que. (Vil.)

* 5. I-21, p.106.

* 6. cf. 「試論・モンテーニュにおける人間の条件」(実践女子大学文学部紀要, 第12集, 1969, 所収)

* 7. cf. 特にII-12.

* 8. Vil. にも Bor. (III p.21) にも、この二つの virgule はない。Ra. (III p.19) 及び *Trois Essais* (p.68) には入れてある。文意が一層はっきりするので後者にしたかった。

* 9. III-2, p.805.

という事が、一つの自己主張の調子をもって云われているが、そのことは、これに続く文章において更に顕著である。《もし世間の人々が、私が余りに自己について語ることで苦情を云うならば、私は、彼らは自己をすら考えていないのを嘆く。 Si le monde se plaint de quoy je parle trop de moy, je me plains de quoy il ne pense seulement pas à soy.》*1と。つまり、自分のことを語るという、一見不羨な叙述は、モンテーニュにあっては寧ろ、自己自身を考えるという、彼の思想的中心をなす行為の結果なのであった。この思想的中心について述べる、次のような箇所に、我々は出会うであろう。《「汝のことをなせ、また自らを知れ」というこの偉大な教訓は、プラトンに度々挙げられている。*2 この言葉の二部分の各々は、我々の義務のすべてを普く含み、同様にまた、その二つの一方は他方を含んでいる。即ち、自身のことをなそうとする人は悟るであろう。「第一の教課は、自分がそれであるところのものは何か、自分に固有なものは何かを知ることだ」と。また、自らを知るものは、もはや他人のことを自分のことだと思ったりはしない。他の何よりも先ず、自らを愛し、また自らを培う。 Ce grand precepte est souvent allegué en Platon : Fay ton fait et te cognoy. Chacun de ses deus membres *3 enveloppe generalmente tout nostre devoir, et semblablement enveloppe son compagnon. Qui auroit à faire son fait, verroit que sa premiere leçon, c'est cognoistre ce qu'il est et ce qui luy est propre. Et qui se cognoist, ne prend plus l'estranger fait pour le sien: s'ayme et se cultive avant toute autre chose : 》*4 と。事実彼が、自らの哲学で到達した最後の点は、自己探求、即ち、自己自身を知ることであった。この、自己自身を知ることの内容については、既に筆者は他の機会に究明をおこなった*5ので、ここではこれ以上立ち入らないことにしたい。

さて、以上のようなことから、自分を描く、自分を題材にするということは、エセエ即ちモンテーニュの、本質的部分に、直接関わると云えるであろう。

この小論で記してきたところを要約すれば、エセエ序文においてモンテーニュが、ここで描くのは自分であると云うのは、一つには、親戚・知友に自分のほんとうの姿をあやまりなく知っておいて貰いたいという意味があったであろうし、二つには、したがって、世間一般に反する意見をエセエに記していても、それは飽くまで個人的意見に過ぎないという意味、第三には、自分の思想の、本質的営みである自己探求を、エセエに記しているという意味があると思われるということであった。

次回以後、エセエにおける自己描写の問題を扱うにあたって、この問題の、エセエ内における位置を概観した。

* 1. ibid.

* 2. この教訓は、Villeyによれば、フィチーノ FicinoによるPlatonのラテン訳 *Opera* (édition de 1546)の中のティマイオス篇 *Timée* の p.72 からの、殆ど忠実な引用であるという (cf. Vil., p.1224 : note sur la 13^e ligne à la page 15, et p.LVI)。尤も、この、自らを知るということの発想は、古くはヘラクレイトスにあるという (cf. G. T. W. Patrick; *Heraclitus of Ephesus*, (Chicago, Argonaut, 1969—reprint), p. 104)。

* 3. Chacun 以下この星印までは、Vil. では *Chascun de ces membres* であり (p.15), Ra. では *Chascun de ces deux membres* であり (I, p.11), Bor. (I, p.14) が上の引用原文のようになって、それぞれ相異がある。Bor.にしたがった。

* 4. I-3, p. 15.

* 5. cf. 「モンテーニュの自然についての試論 (その1)」(広島哲学会誌「哲学」第15集, 1963. 所収), 及び同試論 (その2) (同上「哲学」第17集, 1965. 所収)

註

(1) 引用原典：当論文に挙げる、*Essais* の原典箇所は、(イ) Pierre Villey, *Les Essais de Michel de Montaigne*. (l'édition reimprimée sous la direction de V.-L. Saulnier) (P.U.F., 1965) の頁数を示す。また、引用原文箇所として、“I-3, p.49”という風に記す場合、(上記原書は、元来の *Essais* I・II・III 巻が纏められて一冊本となっているが) *Essais* の元来の第一巻第三章、上記原書の49頁めに、その原文が見出されることを示す。

なお、当論文作製において、絶えず参照した他の原典は、*Essais* の最も忠実な復刻本である(ロ) F. Strowski, *Les Essais de Michel de Montaigne*. (Bordeaux, Pech 1906-1920) である。その他参考にしたのは、(ハ) Maurice Rat, *Les Essais de Michel de Montaigne*. (Paris, Garnier, 1952) である。(ニ) Georges Gougenheim et P.-M. Schuhl, *Trois Essais de Montaigne*. (Paris, Vrin, 1951) も同様に参考にした。上記諸本における引用原文の相異については、重要なものはその都度註記した。

(2) 略号：上記の諸文献を次のように略記する。(イ)→Vil., (ロ)→Bor., (ハ)→Ra., (ニ)→Trois *Essais*。更に、(ロ)の第五巻めを成している *Lexique de la langue des Essais* (par P. Villey, 1933) の略号は、*Lex.* とする。

(3) 〈 〉：原文の忠実な引用を示す。

(4) また、モンテーニュの用いている16世紀フランス語が、現代のそれと著しく異なる場合は、Vil., Ra., *Trois Essais* の註及び *Lex.* を用いて、現代フランス語の意味を註記した。orthographe が、現代のと余りに異なる時は、筆者が註記した。

(5) 短い註は*1, *2, *3で各頁下欄に記し、長いものは(6), (7)…で、このあとに記す。

(6) 例えば、Vil.の索引では、普通の項目に挙げられる事項の数は、5・6であるのに、モンテーニュ自らのことが知られる《Montaigne》という項目に挙げられている事項数は300を越える多数である。Ra.や、英訳 *The Essays of Montaigne* (by E. J. Trechmann, Oxford, 1927), 和訳(関根秀雄, 「モンテーニュ全集」, 白水社, 1957~8; 原二郎, 「モンテーニュ・エッセー」——世界文学大系 No. 9 A・B——, 筑摩, 1962) などでも、事情はほぼ同じである。

(7) Villey は、彼の著書 *Les Essais de Montaigne* (Paris, Sfelt, 1946) において、モンテーニュは自己を描くと云うが、*Essais* の内容は、彼の経験であると同時に、それを越えて、普遍性を持つものにまで生長している。この序文は、気の利いた逆説でしかなかった、と記している(p.90)。関根秀雄氏によれば、『《ただ親類や友人の慰めのため》に書いたにすぎないと云うのも、文字どおりにはうけとれない。』(上の註(6)に記した「モンテーニュ全集」のI p. 3)と記されている。

(8) くわしい原題は、*Journal du Voyage de Michel de Montaigne en Italie, par la Suisse et l'Allemagne en 1580 et 1581, avec des notes par M. de Querlon*. (Paris et Rome, Le Jay, 1774)。

(9) 旅日記の出版について：旅日記は、モンテーニュが、1580年6月から1581年11月にわたって*1おこなった、イタリア迄の旅の道すがら、はじめは秘書に書かせ、あとは自らが記した旅日記である。そこには、一層飾らぬモンテーニュの姿が見られる。しかし、こうした日記があることは、一般には知られていなかった。モンテーニュが死んで、200年近くも経った1770年、ふとした事から、プリュニ神父 Abbé Prunis によってモンテーニュ邸から見出され、其後、ムーニエ・ド・ケルロン Meunier de Querlon によって、1774年、上の註(8)に記した原題で出版された。

(10) エッセエの出版について：モンテーニュは、*Essais* 初版(現行三巻のうちの、はじめのI・II巻)を、1580年5月頃、ボルドーの出版所 Simon Millanges から出版した。第二版は1582年に、極く少数の加筆を加えて同じ所から出版した。第三版は1587年に、二版とほとんど同じ内容で、今度はパリの Jean Richer から出版した。第四版*2は1588年に、今までのI・II巻に600項の加筆を入れ、更に新たに第III巻を加えて、パリの L'Angelier 書店から出版した。1592年にモンテーニュが没した時、この88年版に多くの書込みが施されて、出版するばかりになっていた。この、およそ1000項の加筆を本文に入れて、パリの同書店から1595年に、第五版が出版された。(cf. M. Weiler, *Pour*

* 1 cf. Vil. p. xxv. 及び, *Œuvres complètes de Montaigne* (A. Thibaudet et M. Rat, Pléiade, 1962.) p. xix.

* 2 この88年版は、実際には第四版であるとは考えられないのに、表紙には第五版と印刷してあるという(Vil. p. xxxvii)。したがって、一般に第四版として扱っているので、ここでもそう記した。

connaître la pensée de Montaigne, Paris, Bordas, 1948, p. 175 及び, Vil. の *chronologie sommaire*.)

(11) モンテーニュが、いかに、人間無視と残虐を憎んだかは、筆者が既に他の機会に觸れたので、それを参照されたい。—cf. 「試論・モンテーニュにおける人間の条件」(実践女子大学文学部紀要, 第12集, 1969. 所収)

(12) ここで、《極くありふれた事柄を表現する文も語句も、子供以上に知らない》と云われているが、これがひどい冗談であることは、モンテーニュが受けた教育と経歴の上からも明らかであろう。それらについては、次のようなことが知られている。

彼は、幼時に、ラテン語の直接教育を受けた。^{*1} こうして、ラテン語が余りに自由に操れた為に、次に学んだ中学校では、教師の心胆を寒からしめたという。^{*2} 中学校を出たのち、一般の推測では、ツールーズの大学で法律学を学ぶ一時期を過したであろうと云われている。^{*3} その後、1554年から1570年まで、彼は法官であったが、このあいだに、ラテン語で記された神学の本「自然神学 *Theologia Naturalis*^{*4}」を仏訳し、これを1569年に出版した。^{*5} そして、1571年に城館に隠棲してからは、実に多くの書物を読んだ。この読書の結果は、直接的にも、間接的にも、*Essais* の中によくあらわれている。

* 1 *Essais* (Vil.) p. 173.

* 2 *op. cit.* p. 174.

* 3 cf. A. Thibaudet et M. Rat, *Œuvres complètes de Montaigne*, Pléiade, 1962, p. xiv ; P. Barrière, *Montaigne, gentilhomme français*, Bordeaux, Delmas, 1948, p. 30.

* 4 モンテーニュが *Essais* に記す原題は次の通りである。 *Theologia naturalis sive liber creaturarum magistri Raymondi de Sabonde*. (II - 12, p. 439)

* 5 *Théologie naturelle*, Paris, 1569.